真の天才ネギまに来る！

混沌の渦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真の天才ネギまに来る！

【Ｎコード】
Ｎ８８９１Ｍ

【作者名】
混沌の渦

【あらすじ】
ネギまの世界にネット小説のごとく転生した主人公が木乃香の姉として暴れまくります。（突発的に書いた。後悔はしていない。）

プロローグ（前書き）

やっちゃた。二作目書いちゃった。どうしよう。

プロローグ

「すいませんでしたーーーー！！！！！！」

は？

俺の名は、アレ？思い出せない。なんでだ！？

「それは、死者には名前が必要ではないからです。だから思い出せないのです」

へえ、そうなんだ。てか、今心を読まれた！？

「神に不可能はありません」

「あっそ、じゃあ、その神様（？）がなんでいるの？」

「それはですね、」

話を聞くと神が他の神とゴルフをしていて、自分の打ったボールが地上に落ちて、それが俺の頭に直撃して俺は死んだそうだ。・・・・・・ふざけるな！なんだその間抜けな殺され方！なんでお約束のミスとかじゃないんだよ！

「まあまあ、そう怒らずに。」

お前が言うな！！

「はあ、あなたがそんなんでは、転生させるのやめようかなー。」

なんだって！？

「おい、転生って、ネット小説でおなじみのあれか？」

「はい、そうです。」

「さっきの怒声の事謝ります！だから転生させてください！」

「言われずとも。そもそもさっきのはあなたを黙らせるための脅しです。ちゃんとネギまの世界に転生させます。」

「おい、なんでネギまなんだ！もっｔ「そこしか魂の空きが無いんですよ。後はバイオハザードぐらいですが、」ネギまでお願いします！」

バイオハザードは怖すぎるよ！！

「では、転生させるので願いを言いなさい。可能な範囲でなら叶えます。」

「じゃあ、これください！」

俺が要求したのは、

1、刀語の鑢七実の眼（見稽古）

2、気と魔力をラカンとナギの１０倍

3、王の財宝

4、不老

5、それなりの幸運

以上だ！え？いくらなんでも考えるの早すぎないかって？フフフ、転生するならこんなのが欲しいと思っていたのだよ

「はあ、ずいぶんチートですね。ですがまあ、いいでしょう。叶えましょう。」

「あ、そうそう、時代は指定できる？」

「できません。」

「え、なんで？」

「それをしたら世界崩壊のきっかけになりかねないので。それに、能力をあれだけ要求してそれは無いでしょう。」

それもそうだな。まあ、よしとするか。

「では、いってらっしゃい。あ、それから時代はいつになるかは私でもわからないから。原作キャラに憑依する可能性もあるよ。」

「おい！それを先に言えーーーーー！！！」

そう叫ぶ俺は予想通り突如空いた穴に落ちて行った。

プロローグ（後書き）

ついキーボードを弾いてしまった。両立できるかな？（多分無理）

第一話　再誕したみたいですでも・・・（前書き）

無事（？）に転生した主人公。だが、転生先はなんと・・・

第一話　再誕したみたいですでも・・・

主人公ｓｉｄｅ

「オギャーーーー！オギャーーーー！！」

どうも、私です。あれ？一人称が私になっている？まさかＴＳ！？おのれ、あのクソ神め。いつか殺す。

ちなみにこの産声は私のではない。どうやら私の横にいる赤ん坊の声のようだ。え？そういう私はなんで泣かないのかって？理由は簡単、だるいのだ。なんだか熱にうなされているみたい。なんで？

ん？私の両親がなにか喋っている。なになに、

「やっと生まれましたね。それも双子か。めでたいですね」

「そうね、二卵生みたいだけど。あそうそう、この子たちの名前は？」

「もう決めているよ。姉の方は木乃実、近衛木乃実。妹の方は木乃香、近衛木乃香です」

「木乃実に木乃香。いい名前ね」

な、なんだってーーー！！！近衛だってーーーー！！！！！という事は私は木乃香の姉に！？うーん、予想外でした。

それにしても、本当に体がだるい。あ、意識が朦朧としてきた。

「ん！？木乃実の方、熱があるようだぞ！早く医ｓ」

最後まで聞き終わることなく、私は意識を失った。

五年後

どうも、近衛木乃実です。五歳です。今絶賛布団の中です。なんでかって？理由は簡単。私は病弱なのだ。

なぜかと言うと、あの気を失った時、神から連絡があった。どうやら上司から七実の眼を与えるなら病弱にしないとダメ、と言われたそうだ。うん、いい加減にしろ。

まあ、そのかわりとして三つの宝珠と黒い魔笛をもらった。（生まれた時に握っていたそうだ。）うん、完全にガ〇レンジャーに出てきた（わかる人いるかな？）ロ〇キのあれだ。ちなみに魔笛を吹いてみた。いい音色だ。魔獣召喚は怖いからまだやっていない。

とまあ、それは置いといてとにかく私の体は七実ほどではないが病弱だ。まあ、チート能力持ちで体も健全だったら完全にバグキャラだ。

ちなみに男だったころの記憶はぼやけてしまっていていわゆるお約束の葛藤がなかったのは秘密だ。

とりあえず体の事には満足している。問題は体の事ではなく、周囲の私に対する眼だ。理由は簡単、私の能力のせいだ。

まあ、当然と言えば当然だ。見た事をすぐにできるようになり、魔力と気の量も半端ないではない天才。気にするなと言う方が無理な話だ。ちなみに、噂では既にお見合い話が出ているとか・・・

「姉さま、おはよー」

「おはよう、木乃香。今日も元気なようね」

「うん、今日もうちは元気やでー。そんな事よりも姉さま、今日は友達を連れてきたんよー」

木乃香が毎朝私の所に来るのはもはや一種の生活習慣だ。しかし、友達か。多分刹那の事だろう。

「ほらほら、せっちゃん、そんな遠慮せんと」

「で、でもこのちゃん、木乃実お嬢様病弱なんやし」

「大丈夫やってー、あ，姉さま。この子は桜咲刹那って言うんよー」

「へえ、刹那って言うの。よろしくね。私は近衛木乃実。あと、私は別に気にしないから」

「で、でも。」

うーん、原作通りの子だ。しかし、このままでは堂々巡りだ。よし、一曲奏でるか。

♪～～～～♪～～～～

「・・・きれい」

「そやろー。姉さまは笛、めっちゃうまいんよー」

よし、どうにか収まった。それじゃあ、

「刹那、私は基本的にここにいるからいつでも来なさい。私はいつでも待っているから」

「は、はい」

よし、どうにかなった。

「おーい、三人共、朝から元気ですね」

あ、お父様だ。クンクン、

「お父様、タバコ臭いですよ」

「そやねー。」

「そうですね。」

「「「体に悪い（ですよ、でー）」」」

三人で見事にはもった。

「ハハハ、三人共、厳しいですね。それはそうと、刹那君、そろそろ稽古の時間では？」

「あっ！そういえばそうでした！それでは私はこれで失礼します！！！」

「あ、せっちゃん待ってなー」

やれやれ、あわただしいですね。さて、

「お父様、こんな朝早くにどうしたんですか？」

「ハハハ、やはり見抜いていましたか。では、木乃実」

「なんですか。」

「実は、木乃香を麻帆良学園に通わせようと思うのですよ」

「麻帆良ですか。たしかおじい様が学園長を務める場所でしたね。しかしなぜ？」

「実を言うと、木乃香を守るためです。本当はお前も通わせたかったのですが、医者に反対されまして。すま「いいえ、別にいいです。それに自分の身ぐらい自分でどうにかできます」・・・そうですか。たしかにお前なら大丈夫かもしれませんが、無理だけはしないと誓ってください」

「わかっていますよ。そういうお父様もですよ」

まあ、予想通りですかね。

「では、私はこれで」

「ええ、それでは」

さて、新しい曲でも考えますかね。

第一話　再誕したみたいですでも・・・（後書き）

うーん、内容に無理があったか？

キャラ設定（前書き）

文字通りの意味です。

キャラ設定

近衛木乃実

容姿は木乃香と七実を足して2で割った感じ。性格はどこか掴みどころがない。

身長は原作時で木乃香より少し高い。体重は秘密。

能力

得意魔法

特に無し。（なんでもできてしまうため。）強いて挙げれば氷と雷？

体術

京都神鳴流（免許皆伝）

王の財宝

基本的に刀や魔笛等をいれている。宝具はあまり使わない。（体への負担を考慮して）なぜか完成形変体刀十二本が入っている。七実の本等の倉庫になってしまっている。

そこそこの幸運

なにかをやろうとした時、都合よくできる程度の幸運（例　読書をしようとしたらちょうど注文していた本が届いた等。）

アイテム

黒い魔笛

ガ〇レンジャーのロ〇キが持っているのとよく似ている。音色は一緒。

三つの宝珠

これまたガ〇レンジャーでロ〇キが持っていたのとよく似ている。（召喚されるのは別の生物）

魔獣

ダークウルフ

体長3メートル程の漆黒の狼。主に木乃実を乗せて移動する。名はムーンエッジ。愛称エッジ。

ライトホーク

体長3メートル程の純白の鷹。主に偵察を担当。名はスノーアイ。愛称アイ。

デルタシャーク

体長3メートル程の蒼い鮫。主に戦闘を担当。名はブルーテール。愛称テール。

キャラ設定（後書き）

作者のネーミングセンスの無さが如実になりました。（笑）

第二話　（前書き）

いよいよ本編と合流します。

第二話

九年後

どうも、木乃実です。十四歳です。え？時間が飛んでいる？気にしたら負けですよ？それはそれとして、突然ですが私は麻帆良に行きます。理由は医者に体力的にそろそろ行っても問題ないと判断されたから。

ちなみに既に図書館島は終わり、進級を控えているそうで。ゆえに私は新学期から学園に通う事になる。

「木乃実、わかっているだろうが向こうでは、」

「みなまで言わないでくださいお父様。神鳴流を使わないでしょう？理解しています。」

そう、私は神鳴流を使える。修行の様子を見て覚えた。斬魔剣弐の太刀をやって見せたら（当時八歳）みんな白くなっていた。（お父様も）中には落ち込んでいる人も（笑）ちなみに得物はなぜか王の財宝の中にあった絶刀鉋や斬刀鈍を使っている。

「まあそれはともかく、体に気をつけて。」

「重々承知しています。では、行ってまいります。」

そして私は旅立った。

三時間後

私は今学園長室にいる。当然ながらそこには相変わらずの妖怪頭のおじい様がいる。

「お久しぶりですおじい様。相変わらずお元気な様子で。」

「ふぉふぉふぉ、そういう木乃実の方こそ元気じゃのう。さて、寮の部屋なんじゃが一人で使ってもらう事になるのう。」

「構いません。むしろそのほうがいいです。部屋を広く使えます。」

「そうかの。まあどうせそういうじゃろうと思っておったから和風に改築しておいたぞ。」

「ありがとうございますおじい様。では、私はこれで。」

「ああ、ちょっと待ってくれぬかのう。もうすぐ木乃香がくるのでのう。」

「木乃香が？わかりました。待ちましょう。」

とまあ、待つ事約三分、

ドタドタドタ、バン！

「ハアハア、じいちゃん、姉さまが来るって本当なｎって姉さま！」

「久しぶりね木乃香、九年ぶりかしら。おっきくなって。」

「そういう姉さまこそ、うちよりもおっきなって、びっくりしたわー。」

「ふふ、木乃香、つもる話もあるでしょうがそれは寮でするとしましょう。」

「そやな、それじゃあじい様、うちら帰るわー。」

「おお、そうか。気を付けてのう。」

十五分後

寮到着。とりあえず部屋に。無論、私の方の。

「「・・・・・・」」

二人して言葉を失う。なにせ、京都の私の部屋を小さくして持ってきたかの如くそっくりなのだ。

「やるわね。おじい様。まさかここまで似ているとは。」

「そ、そやねー。さすがじいちゃんや。」

「「フフ。」」

さて、それから二時間ほど他愛のない話をした後、私は浴衣に着替えた。なんでかって？こっちの方が落ち着くから。それを見た木乃香が「あの頃に戻ったみたいやわー。」と言っていた。

と、そこで木乃香の携帯が鳴った。どうやら下で私の歓迎会をやるそうだ。多分朝倉辺りは既に知っていたのだろう。予想通りだ。

「姉さま、早く行こう！」

「はいはい、そう急かさなくてもいいから。」

私の腕をつかみ引っ張る木乃香。とまあ、なんやかんやで下に降りると・・・

パーン！パーン！パパーン！

「「「「「ようこそ、二年A組へーーーー！！！」」」」」

「おお。」

うーん、原作で見てたけど予想以上だ。

「すごい、和風お嬢様だ！」

「おお、やっぱりこのかさんに似てる！」

「うんうん、ねえ、趣味は？」

「好きな食べ物は？」

「「「ねえねえ、」」」

「え、えーと。」

「ハイハーイ、質問ならこの朝倉におまかせを。それじゃあ、ベタな所で趣味は？」

「読書。」

「双子って聞いてましたけど、そこまでそっくりじゃあないですね。」

「二卵生ですので。」

「ふーん、じゃあ、・・・」

とまあ、十分ほど質問の嵐。正直疲れた。

「それにしても、」

「ん？どうしたの？木乃実さん？」

「このテンション、お酒でも飲んでるのかしら？」

「あー、気にしないでください。これで素です。」

「へえ。」

「あ、あの。」

「ん？」

よばれて振り返って見るとと担任のネギ先生が。

「僕、担任のネギ・スプリングフィールドです！よろしくお願いします！」

ご丁寧に深々とお辞儀をする。うーん、原作でもそうだがさすが

英国紳士。ジェントルマンだ。

「いえいえ、先生、こちらこそ。近衛木乃実です。よろしくお願いします。」

こちらは正座で返す。・・・別に対抗意識ではないですよ？

「て、えええええぇぇぇ！せ、正座って！」

「「「「「「おおーーーー」」」」」」

「ふふ、からかってみたんです。」

うーん、見事なまでのうろたえぶりだ。

「ハハ、おーい君たち、もうすぐ十二時だ、そろそろお開きにしなかい？」

「あ、そういえばそうですわね。はいみなさん、片づけをはじめますわよー。」

「「「「「はーい。」」」」」

「あ、だったら私も。」

「いいって、木乃実さん。私たちだけで十分ですって。」

「そうそう、第一、体弱いんでしょ？もう休みなって。」

「・・・そうかしら？それじゃあ、お言葉に甘えて失礼させていただきます。それではみなさん、良い夜を。」

部屋に戻ると誰が敷いたのか知らないが布団が敷いてあった。つっこんだら負けか？

「ふう、もう寝るとしましょうか。」

私は寝巻に着替えるとすぐに寝た。

第二話　（後書き）

次回は三巻の吸血鬼騒動から始まる予定です。

第三話　吸血鬼編その１（前書き）

予告通り吸血鬼編をやります。

第三話　吸血鬼編その１

「「「「「「「3年！A組！！ネギ先生ーーーーっ？」」」」」」」

（バカどもが・・・・）

（アホばっかです・・・・）

（騒々しいですね）

原作の三巻冒頭のお出迎え。予想以上に騒がしいですね。まあ、私には関係ない。新しい曲でも考えますか。闇はどこまーでも孤独だよ。うーん、このあとどうするか。うん？

「で、では皆さん身体測定ですのでえとあのっ今すぐ脱いで準備してください。」

「ネギ先生のエッチーーッ？」

「うわーん、まちがえました。」

うーん、天然ですね。さて、私も脱ぐとしますか。

身体測定中

「「「「「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」」」」」

「・・・」

何故だ？何故みなさん、私の方を凝視しているのです？うーん、思いつかない。

「み、みんな姉さまの事をそないに見んといてー。」

「「「「「「「は、はい！」」」」」」」

「姉さまも少しは隠してーなー。」

ああ、そういう事か。私の肌は病的なまでに白い。白すぎる。だからみなさん見ていたのか。私自身が見慣れすぎていてすっかり忘れていた。私とした事が。

「木乃香、ごめんなさい迷惑をかけてしまって。」

「め、迷惑なんてそんな、うちは別に気にせーへんて。」

「そう？ならいいのだけれど。」

やれやれ、相変わらずですね。木乃香。

「ねえねえ、ところでさ最近寮ではやってる・・・・あのウワサどう思う？」

お、どうやらあの件のようだ。そうなると今夜か。フフフ、ようやく面白くなってきた。

「ね、姉さま。顔怖いで～。」

「え？」

見れば他のみなさんもなんだかおびえているように見える。ああ、七実の邪悪な微笑を無意識の内にやってしまったのか。（京都の方でも恐れられている。）

「あら、これは失礼。」

この場はこれでごまかすとしますか。それよりも今夜の事だ。とりあえず、今は中立の立場にでも・・・

その夜

「風強いですねーーちょっと急ごうかなーー。こわくない～～♪・・・こわくないです～～こわくないかも～～♪」

お、来たようだ。しかし、自己暗示になってませんよ？というか、急いでいるようには見えませんよ？

「27番宮崎のどかか・・・・悪いけど少しだけその血を分けてもらうよ。」

今度はエヴァ登場。さてさて、しっかり魔法を見せてもらいましょう。

「キャアアアァァッ」

「待てーっ。」

「ぼ・・僕の生徒に何をするんですかーっ。」

『風の精霊１１人連鎖となりて敵を捕まえろ魔法の射手・戒めの風矢』

「もう気付いたか『氷盾』」

よし、しっかり見させてもらった。というか、あんなにうかつに使っていいのか？まあとりあえず次の場所に向かうとしよう。

「エッジ、いくわよ。」

「了解した。我が主。」

あ、この子は私が魔獣召喚で呼び出したダークウルフのムーンエッジ。だからエッジ。とまあ、それはともかく私達は移動する。あの名（？）シーンを見るためだ。

十分後

「私はお前の父つまりサウザウドマスターに敗れて以来魔力も極限まで封じられも～～１５年間もあの教室で日本のノー天気な女子中学生と一緒にお勉強させられてるんだよ！」

よし、目当てのシーンは見れた。個人的にはこのくだりは好きだ。

「よし、エッジ、帰るわよ。」

え？、なんで私達の事がばれないのかって？

それはエッジの能力の一つ、気配遮断のおかげだ。この能力の使用中はたとえ後ろにいようが気付かない。まあ、直接見られたらすぐにわかるんだけど。エヴァは気づいてるかもしれないが。まあ別に問題はないだろうが。

次の日

私は授業を式に任せて屋上にいる。実を言うと授業は前世の記憶があるためにつまらない。さて、それはともかく何故屋上にいるかというと、エヴァに会うためだ。

「こんにちは、エヴァさん。」

「ん？お前は昨日いたな。近衛木乃実。なんの用だ？」

やっぱり歴戦の吸血鬼であるエヴァを騙すのは無理だったか。まあ、当たり前だが。

「いえ、ただ私に魔法をご指導いただきたいと思いまして。」

「断る。私は弟子をとるつもりは無い。第一にお前では私の教えに耐えられる体力が無い。それに、なんの見返りも無しにやるわけがないだろう？」

「見返りですか？そうですね、あなたにかけられた呪いを解くのと、

あなたの体を成長させるでどうでしょうか？あと、私は見るだけで十分なので体力の事は心配いりません。」

「な、何？それは本当か？だったら今すぐやれ！！」

おお、見事な食いつきぷりだ。

「落ち着いてください。ここでは人目につきます。」

「そ、それもそうだな。よし、放課後私の家に来い。」

「わかりました。」

しかし、みごとなうろたえぶりですね。それだけコンプレックスだったのか？まあ、どうでもいいですが。

放課後エヴァの家（別荘内）

「よし！早速やってみろ！」

「ハイハイ、わかりました。ではまずは呪いのほうから。」

『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）・破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）』

「な、なんだ、この威圧感は？その短剣はいったい？」

「では、いきますか。」

ぶっつけ本番だけど、たぶん大丈夫だろう。

「オイ！人の話を聞け！！」

無論聞くつもりはない。

「えい。」

「うお、いきなり刺すな！」

「はい、呪いは解けましたよ。」

「な、なに？ほ、本当だ！やっ、ヤッターーーー。」

「アア、マスターがあんなに可愛く。」（保存しましょう。）

よし、うまくいった。失敗したら死んでいたという事は黙っていましょう。言ったら殺されるかも。

「よし！次は私を成長させろ！」

「それは私に魔法を見せていただいてからです。」

「よし！わかった！見せてやる。よく見ておけ！最強無敵の悪の魔法使いの力を！！」

『こおる大地』　『闇の吹雪』　・・・・・

十分後

「どうだ！これが私の力だ！さあ、早く私を成長させろ！」
「はあ、わかりました。でもその前に『氷神の戦鎚』」
軽めに一個作ってみる。うん、うまくいった。
「な、なんだと！まさか本当に見ただけで！」
「ええ、そうですよ。さて、あなたの体を成長させる方法を教えます。」
「方法？何故だ？今すぐ成長させろ！」
「急に成長したら不審がられるでしょう？だからちょっとずつ成長するんですよ。」
「それもそうだな。よし、わかった。で、その方法とは？」
「簡単です。この注射を月に一度一本でいいんです。」
え？なんでそんなのがあるかって？ご都合主義ですよ。突っ込んだら負けです。
「なに？それだけか。」
「はい。それだけです。」
「よし！ならさっさとやれ！」
「ハイハイ、ではエイ！あ、ちなみに副作用として花粉症に似た症

状が出ます。」

「おい！それを先に言え！」

まあ、どっち道風で寝込むのだから同じか。

第三話　吸血鬼編その１（後書き）

うーん、内容に無理がありすぎたか？

第四話　吸血鬼編その２（前書き）

今回は主人公が悪役かも。

第四話　吸血鬼編その２

どうも、木乃実です。あの後カモによる風呂場での騒動がありました。うん、原作どおりです。え？なんで詳しくないかって？私はあの淫獣が嫌いです。以上。

二日後

どうも、今私はネギ先生とアスナさんを尾行しています。ちなみに私服（浴衣）。なんでかって？茶々丸さんを守るためだ。おっと、ネコへのエサやりが始まった。

そろそろですね。遮音結界と人払いの結界を張ってと。では、てっ、すでに魔法の射手が！

瞬動！よし！ギリギリセーフ！

『氷盾』

バキキキン！

「「「え！？」

フー、どうにか防げた。あ、ヤバイ発作が。

「ゲホゲホ！」

「こ、木乃実さん、大丈夫ですか！？」

「ケホ、大丈夫です。それにもう慣れてますので。」

この程度は幼少期は日常茶飯事だったから平気だ。

「あ、あの、なんで木乃実がいるんですか！？」

「茶々丸さん、この場は私が納めますので。」

「そうですか。ではネギ先生、私はこれで。」

「あ！茶々丸さん！」

うーん、原作通り純粋すぎますね。だから淫獣の口車に乗せられたのか。これはお仕置きが必要ですね。うん、今後のためだ。決して前世の私がこのハーレム野郎にむかついたからではない。うん。

「ネギ先生。」

私は凄みを込めて言う。

「な、なんですか。木乃実さん。なんで邪魔をするんですか？」

やっぱり正義を信じて疑わない少年だ。まあ、周りの環境があまり良かったとは言えないでしょうし、こんな風に育つには当然か。

「はあ、ネギ先生。自分がなにをしようとしたのか分かっているのですか？」

「な、なにって、茶々丸を。」

「だから、自分の生徒に攻撃をするのが正しいのですか？」

「！」

はあ、やっと気付いた。というか、原作では誰もその事を指摘してなかったような。まあ、いざとなったらおじい様に頼むか。

「はあ、まったく、理解していなかったのですね。」

「や、やいやい！てめえ、さっきから一体なんなんだ！」

「私ですか？そうですね。通りすがりの生徒です。あ、それからまだ茶々丸さんを攻撃しようというのなら、私が相手をしますよ。」

「あ、相手って、木乃実さんがどうやって戦うんですか？」

「こうやってです。」

魔笛の三つの穴に宝珠をはめ込む。

「魔獣召喚。」

～～～♪～～～～♪

「な、なに？この曲は？」

吹き終わるとまず最初に来たのは

「ライトホーク」

次は

「デルタシャーク」

最後に

「ダークウルフ」

「こ、こいつは召喚魔法！な、なんだ、この狼たちは！」

お、淫獣はさすがに気付いたか。

「この子たちは魔獣。」

「魔獣？」

「そうです。さて、もしもまた茶々丸さんを襲のなら、この子たちのエサになってもらいます。」

「で、でも茶々丸さんｈ「でもじゃありません。それは生徒を襲う理由になるとは思えません。それとも、先生は生徒を傷つけるのが好きなのですか？」」

「う、ううう、ごめんなさーい！」

「あ！ちょっとネギ！」

「兄貴！」

逃げてしまった。まあ、そのために色々と言ったのだが。

「追わなくてよいのですか？」

「必要無いわアイ。さ、帰るとしましょう。」

転移で部屋に直接帰る。さて、読書でもしますか。

第四話　吸血鬼編その２（後書き）

うーん、短い。

第五話　吸血鬼編その３（前書き）

吸血鬼編終了です。短いです。

第五話　吸血鬼編その３

どうも、木乃実です。現在停電中です。またまた時間が飛んでる？気にしたら負けですよ？まあ、作者の文章力不足はいつもの事。
さて、ネギ先生とエヴァ、既に橋にまで来ている。お、結界に捕まった。では、

「アイ、あなたは橋の近くで待機して。多分エヴァさんが落ちてくるから、キャッチして。」

「わかりました。」

うーん、アイは自己主張が弱いなー。別に気にしないけど。さて、あっちはどうやら仮契約を終えたようだ。よし、これで光と雷が見れる。こないだ見た氷と闇とは逆ですね。

「喰らえ『魔法の射手氷の１７矢』！！」

「ううっ・・『魔法の射手連弾・雷の１７矢』！！」

「エッジ、橋へ。」

「了解した。」

やっぱり雷の暴風は間近で見たい。

「『ラス・テルマ・スキルマギステル来れ雷精風の精！雷を纏いて吹きすさべ南洋の風雷の暴風』！！」

「『リク・ラクラ・ラックライラック来れ氷精闇の精！闇を従え吹雪け常夜の氷雪闇の吹雪』！！」

「ぐぅっ・・くくっ・・」

（ス、スゴイ力だ、ダメだ・打ち負ける・・・・いやまだだもう逃げない）

「ええい！！」

「は・・！？ハックシュン！！」

うーん、考えてもみればくしゃみが勝因というのは、ありなのか？

「な・・何！？」

ドオンッ

「ネギー！！」

「マスター・・」

ゴオオオ

「・・やりおったな小僧・・・・」

うん、そろそろ近づいても問題ない。そもそも今回暴れたのはナギへの仕返し的な意味合いが強い。あの表情を見る限りもう満足しているようだ。

「アイ、お見事。」

ちなみにエヴァは逆さで飛ぶという器用な事をしたアイが爪でキャッチ。・・・痛そうだ。まあ、大丈夫だろうがだってエヴァだもん。

「お前は木乃実の・・・て、強く掴むな！爪が食い込む！」

「あの鳥は！？」

「なんでいやがるんだ！？」

はい、外野は無視。

「こんばんは、エヴァさん。負けちゃいましたね。」

「ああ、まさかくしゃみで負けるとは思わなかったよ。」

「て、なんで木乃実さんがいるの！？」

「暇つぶしです。では私は病弱なのでこれで。」

「お前、こんな時だけ病弱をアピールするな。」

「いえいえ、手持ちのカードを効率よく捌くのは基本ですよ？」

まあ、これといって何かやったわけではないが。さて、外野は無視して退散。次は修学旅行か。

第五話　吸血鬼編その３（後書き）

主人公を京都で仮契約させたいけどアーティファクトが思い浮かばない。どうしよう。

第六話　修学旅行編その１（前書き）

今回日記のような気が。（汗）

第六話　修学旅行編その１

「修学旅行に行くぞ！」

「は？」

どうも、木乃実です。現在エヴァの家です。暇つぶしに来たらそんな事を言われました。

「あの、突然なんですか？エヴァさん。」

「今年はついに修学旅行に行けるんだぞ！それを喜ばずしてなにを喜べと言うんだ！」

「アア、マスターが可愛く。」（保護、バックアップ完了）

「ふーん、そうですか。では私はこれにて失礼します。」

そこまで興味はないですし、さっさと帰って旅行の準備をしますか。

「ああおい！待て！」

「はあ、なんですか？」

「貴様にこれを渡しておこうと思ってな。受け取れ。」

「指輪ですか？フムフム、発動媒体のようですね。」

「ああそうだ。まあ、貴様には必要ないだろうがな。だが持って置いて損は無いはずだ。」

「そうかもしれませんね。では、これにて。」

これが二日前の事。そして現在、新幹線の車内。

「姉さま！姉さま！うち久しぶりの京都やわ～。」

「そう言えばそうですね。まあ、私にしてみればとんぼ返りのようなものですけど。」

「あはは、そういえばそうやな～。」

「「「「きゃーーー！？」」」」

「「「「ん？」」」」

出たー。カエルの団体さん。まあ、私には関係ないけど。

「て、木乃実さん、なに一人だけ悠々と読書してるんですか！」

「暇なので。」

「暇なら手伝ってくださいよ～。」

「病弱ですから。」

必殺の病弱で黙らせる。

一時間後

清水寺

「京都ーーっ！！」

「これがウワサの飛び降りるアレ。」

「誰かっ！！飛び降りれっ。」

「では拙者が。」

「おやめなさいっ。」

うーん、騒がしい。もう、旅館まで飛んじゃっていい？

そして旅館にて

どうも木乃実です。またまた飛んで現在木乃香が誘拐されました。
え？助けないのかって？あの子達のフラグを壊すつもりはありません。以上、初日終了。

二日目夜

パクティオー大会はどうでもいいのでさっさと就寝。

三日目シネマ村

作者の文章力不足のせいでここまで飛びました。ちなみに私は普段と変わらずの浴衣姿です。そして、私の目の前には、

「どちらさまでしょうか？身に覚えがないのですが？」

なんとフェイトがいる。まあ、スクナ復活において私というイレギュラーは見逃せないでしょうね。

「近衛木乃香。西の魔獣従えし姫君だね。ふむ、なるほど近衛木乃香以上の魔力か恐ろしいね。」

「そういうあなたは唯の人間、いえ、そもそも人と形容すべきなのでしょうか？どちらかというと人形めいているように見えますね。それで？私になんのようですか？誰かさん。」

「ああ、そういえばまだ名乗ってなかったね失礼した。僕はフェイト・アーフェルンクス。君にようがある。」

「そうですか。で、そのようとは？」

「なに、僕達の邪魔をされないために君を石化させようとしてる。それだけだよ。」

「・・・『雷の暴風』」

「！」

おお、抜き打ちで放ったのをいとも簡単に防いだ。まあ、当然か。

「なかなかの威力だ。本気を出してしまったよ。」

「では、別の場所で一戦交えるとしましょう。」

「それもそうだね。下手に暴れれば闇の福音が出かねない。場所を変えよう。」

さてさて、どうなる事やら。

第六話　修学旅行編その１（後書き）

次回でフェイトとガチバトルです。

第七話　ガチバトル（前書き）

アクセスが六万を・・・。ありがとうございます！！

第七話　ガチバトル

どうも、木乃実です。現在どこかの森です。ここなら多少暴れても問題無いでしょう。

「では、始めますか。『魔法の射手氷の千一矢』」

「おっと。」

ふーむ、やはりかわされますか。まあそれ以前にあの障壁を突破するのは難しいでしょうが。それに長期戦になったら確実に負ける。となると、

『氷神の戦鎚』『雷の暴風』

氷神の戦鎚を投げた後に雷の暴風を発射して隙を突く。あ、防がれた。

「・・・『冥府の石柱』」

「『氷神の戦鎚』」

攻撃を相殺。そして、お返しに、

「お返しです。『冥府の石柱』」

「！」

お、さすがに驚いてる。でもそこはプロ。同じ攻撃で相殺する。

「驚いたよ。まさか見るだけで自分のものに出来るとは。異端の天才と呼ばれるだけの事はあるね。」

「それはどうも。まあ、天才すぎるのも考えものですが。」

「それもそうだね。どうやら天才性に体がついていけないようだね。」

「ええ、ですから速攻で決めさせてもらいます。」

王の財宝から斬刀を出す。そして瞬動。

「！」

「『秘剣零閃』！」

ち、片腕だけか。やはり本家本元のようにはいかないか。

「・・・驚いたよ。まさか音を置き去りにする居合とは。でも、瞬動の後に今の技だ。もそんなの体力は残ってないんじゃ？」

「ええそうですね。逃げ切れるかどうかも怪しいですね。」

困った。エッジ達を呼ぼうにも呼んでる間にやられる。ここは素直に石になっておくか？それとも、ん？あの光はまさか、

「む、どうやら勝負はお預けのようだ。僕は依頼主のところに戻るとするよ。」

「そうですか。それは助かります。では、私もこれにて。」

フー、危なかった。多分さっきの光は木乃香が刹那を治した時のだろう。となると、これから本山の方に向かうのか。ふむ、このまま合流するか、それとも先に向かうか、どうするか。

「その前に着替えますか。汗でびしょ濡れですし。」

考えるのはそれからだ。それにしても、この先の戦いにおいての体力のなさはマズイ。なにか対策を考えなければ。うーん、仮契約でもしますか？

第七話　ガチバトル（後書き）

やっぱり戦闘描写は難しい。内容が薄い。

アンケート（前書き）

変更しました。すいません。

アンケート

どうも、作者です。今回は主人公のアーティファクトについてアンケートをやりたいと思います。
え？まだ考えてなかったのかよ？ハイ、無視無視。では、私が考えたのは以下の通りです。

その１

名称　免罪の砂時計

能力　砂時計の砂が残っている間、体が健康になる（悪刀鐚のリスクがないようなもの）。砂の量は所有者の魔力に比例し、砂は一度落ちたらまた使うのに５日かかる。

その２

名称　八岐大蛇（やまたのおろち）

能力　神話に登場する八岐大蛇を呼びだす。サイズは手のひらサイズから山のごときサイズまで自在　　に変更可能。また、所有者と融合（背中に貼りつく程度）し、手足のごとく扱える。一応喋れるが、無口のためあまり喋らない。

どうですかね？どっちにしても主人公の弱点を克服させようと考えたものです。なお、投票のさいはその１は１、その２は２、それ

以外の方がいいという方は3、という形で感想として送ってください。

たくさんの投票お待ちしてます。

アンケート（後書き）

投票お願いします。

第八話　本山（前書き）

短いです。あと、アンケートはまだやります。

第八話　本山

どうも、木乃実です。今本山に向かっています。多分途中でネギ先生達と合流する事になるでしょう。

「あ！木乃実さーん。」

噂をすればなんとやら。ネギ先生達ですね。既に朝倉さん達と合流済みという事は、もう本山は近くですね。

「どうも、ネギ先生。先生達も本山へ？」

「あ、はい、そうです。木乃実さんもですか？」

「ええそうd「レッツゴー！」おや、のどかさん達先に行っちゃいましたよ。」

「あーーッちょっとみんなーそ、そこは敵の本拠地なのよ！？」

「何が出てくるか・・・・！」

「「「「「「お帰りなさいませ木乃実お嬢様、このかお嬢様ーーっ」」」」」」

「「へ？」」

うーん、原作でも思ったけど、大げさなお出迎えですねー。まあ、どうでもいいですけど。

「うっひゃーコレみんなこのかのお屋敷の人？」

さーて、夜までとんでもいいですよね？

そして夜

「お父様、少しよろしいでしょうか？」

「木乃実、どうしたんだい？なにかあったのか？」

「ええ、実は、ここに来る途中フェイト・アーウェルンクスと名乗る白髪の少年と一戦交えました。」

「なに！？」

「それでお父様ならなにか心当たりがあるのではないかと思いまして。」

「うーむ、そうですね・・・すまないが答えられない。」

「そうですか。別に期待してたわけではないので。」

「そう言うと思いましたよ。」

「では、私は久しぶりに散歩でもしてきます。あと、お父様、タバコはやめた方がいいですよ？」

「ハハ、相変わらず手厳しいですねー。」

「では、これにて。」

さーて、木乃香がさらわれて、祭壇に向かうあたりで私も向かうとしますか。

結果発表

どうも、作者の混沌の渦です。アンケートの結果を発表したいと思います。

アンケートの結果、一番になりました。ただし、今後の魔法世界編で木乃香と、もしくは学園祭編でエヴァとして二番を出す可能性もあります。（作者はあきらめが悪いのですよ）

ちなみに制限時間はおよそ二十分程です。あと、本編で主人公が解説しますが、壊れた場合は直るのに一週間以上かかります。

わがままな作者ですいません。あと、次話は近日中に投稿する予定です。（あくまで予定であり、確定ではありませんので悪しからず）

第九話　キス（前書き）

もうタイトルで内容がわかるでしょうね。

第九話　キス

どうも、木乃実です。今ネギ先生達と一緒です。ちなみに現在『風花旋風風障壁』の中です。

「二手にわかれるこれしかありません。」

「そうですね。ちょうど四人（と一匹？）ですし、二人一組で動くのがいいでしょう。」

「て、木乃実さん病弱でしょ！？無理だって！」

「そ、そうですよ。いくら魔獣がいるからって無茶ですよ！」

予想通りの反応ですね。なら、予定通りに、

「そうでしょうか？では、キスでもしますか？」

「キ、キキ、キスーーー！！」

「な、なにを「いや、案外いいかもしれないぜ、兄貴。」カ、カモ君？」

「仮契約っすよ！運がよけりゃー強力なのがでてくるかもしれないぜ。」

「その通り。それにこの緊急事態に手札は多い方がいいですよ？」

正直、あの淫獣の利益になる事はしたくなかったけど、これしか

手がないのも事実。腹をくくってやることにしました。

「で、でも。」

「緊急事態だ！手札は多い方がいいだろうがよぉ！」

「「は、はい！」」

本音は金が欲しいだけなんじゃ？まあ、だからこその変態おこじょなのだが。

「す、すいませんネギ先生・・・・」

「いえ・・あのこちらこそ・・・・」

仮契約

「よし！次はあんただ！」

「では、えい。」

「！！！」

仮契約

いきなりキス。時間もないですしね。さてさてどんなのでしょうか。ふむふむ

称号　異常司る姫君

色調　Ｎｉｇｒｏｒ（黒）

徳性　ｓａｐｉｅｎｔｉａ（知恵）

方位　ｓｅｐｔｅｎｔｒｉｏ（北）

星辰性　ｊｕｐｉｔｅｒ（木星）

アーティファクト　免罪の砂時計

カードには法衣を着た私が白い砂時計を持っている絵が描かれていた。・・・多分法衣は七実が着ていたからだろう。異常司るは納得がいくが。それにしても、この効果は・・・。ふふ、私のためにあるようなものではないか。

「「「ヒ！」」」

「あ、あの～お嬢様、笑っているのに怖いです。」

おっとまたもや邪悪な微笑をしてしまった。だが、今はそれよりも、

「これは失礼。ですが今は木乃香を取り戻すのが先決です。」

「は！そうだった！」

「そろそろ障壁が解けますから、解けると同時に私は飛び出しますので先生は私とは別の方向から頼みます。」

「ええ！？だから木ｎ「問題はありません。」りょ、了解！」

え？なにをしたか？フフ秘密です。

「アイ。頼みますよ。」

「振り落とされないようにしっかり掴まっていてください。」

「では、おさきに。」

「ハ、ハイ！気を付けて！」

さーて、問題はフェイトだ。石化の魔法をやられたら厄介だ。それにおそらくだが部下の女の子達も近くにいるはずだ。エッジが匂いがすると言っていたから間違いないだろう。ん？

『障壁突破・石の槍』

「！！アイ！急上昇！」

「了解！」

ヒュン

フー危ない危ない。直撃をもらう所だった。

「やあまたあったね。近衛木乃実。悪いけどこの先には行かせないよ。」

「でしょうね。なら力づくで通させてもらいます。」

さーて、第二ラウンドと行きますか。

第九話　キス（後書き）

テスト期間中に更新するってどうなのかな？

第十話　再戦

どうも木乃実です。今フェイトとにらみ合っています。正直な話、アーティファクトを使っても勝率は低いでしょう。もっとも今回は勝つのが目的ではなく木乃香の救出が目的なので別に無理をする必要はありませんけど。

「そういえば仮契約をしたみただね。」

「ええ。おかげで私のためにあるようなアーティファクトが手に入りました。」

「そう。それは良かったね。」

「ああそれからあなたのお仲間の女の子たちならエッジとアイが相手をしていますから。」

「む、彼女たちに気付くとはやるね。」

「いえいえ私はなにも。エッジが匂いを見つけただけです。」

「ああ、なるほど。今後は気を付けないとね。」

「そうする事をお勧めいたします。では、話はこれくらいにしますか。『魔法の射手・氷の１０１矢』」

抜き打ちで放ったけど障壁で防がれる。まああの曼荼羅のような障壁を突破するのはそんな容易い事ではないでしょうけど。

「ふん。そんな様子見はやめた方がいいんじゃないかい？」

「ですよね。では、『闇の吹雪』」

「おっと。」

さすがにこのレベルの魔法はよけるようですね。まああのエヴァの魔法ですし、当然ですよね。

「よけますか。なら、『氷神の戦鎚』」

「フン『冥府の石柱』」

「ムムやはりそうなりますか。では、『来れ』」

「む、その砂時計、免罪の砂時計だね。」

「おや、ご存じでしたか。」

「たまたまだけどね。なるほどたしかに君のためにあるような代物だね。」

「ええそうでしょ？では、時間がもったいないのでさっさと決めさせてもらいます。」

ここでみなさんに私の免罪の砂時計について説明しましょう。まず発動中は私の体は健康になる。制限時間は所有者の魔力に比例し、私の場合は１５分。一度使った砂はまた使うのには一週間かかる。

正直な所、私以外が使った場合はあまり意味がないでしょうね。戦いにでる人って健康管理はしてるでしょうしね。さて、説明はこ

のくらいにしますか。

「『雷の斧』」

「む、まさか雷も使えるとはね。反対の属性のはずなんだけどね。」

「それはどうも。では、砂時計の砂を温存したいのでそろそろ木乃香の所に行かせてもらいます。」

「通すと思っているの？」

「ですよね。なら、テール！」

バクン

「！！」

「フフ、テールは地中でも水の中のように移動可能なんですよ。」

そう、今テールがフェイトの腕を引き千切ったのだ。そしてその隙に私は通らせてもらったのだ。もちろん瞬動で。せいぜい2、3秒程度しか稼げないでしょうしね。

「さーて、今は原作のどのあたりですかね？ん？あれはスクナですね。という事はもうすぐエヴァの出番ですか。ハア、なにも急ぐ事はなかったみたいですね。」

せいぜいエヴァの数少ない見せ場でも楽しみますか。

第十話　再戦（後書き）

み、短いうえにグダグダに・・・。ああ、文才が欲しい。

第十一話　エヴァようやく活躍！？（前書き）

遅れてすいません。エヴァはあまり見せ場がないのではと感じている作者でした。

第十一話　エヴァようやく活躍！？

どうも、木乃実です。今ネギ先生が遅延呪文でフェイトの動きを封じている所です。・・・腕が既にあります。というか、私よりも先に来ていて原作通りの流れになっています。

「さっきまでの私の努力はなんだったのでしょう・・・。」

そういえば、カードの機能で刹那達を呼ぶ件がありましたけど、もしかして私もなんでしょうかね？

「と言っている間に呼び出されていますね私。」

「お嬢様？なにを言っているのですか？」

隣にいる刹那に突っ込まれてしまいましたよ。やれやれ。

『ヴィシュ・タルリ・シュタル・ヴァンゲイト小さき王八つ足の蜥蜴邪悪の主よ時を奪う毒の吐息を　石の息吹！！』

て、石化の魔法の事忘れてた！瞬動！

「な、何とか逃げられた。奴はまだこっちに気づいていません。」

うーん、どうしよう。本当はエヴァがスクナを倒してから出てくるつもりだったけど、こうなったらフェイトの足どめをするとしますか。そのために、まずは

「刹那たとえあなたの正体がなんであれ、あなたはあなたです。私

と木乃香の大切な友人である事に変わりはありません。」

「お、お嬢様・・・ハ、ハイ！」

よし。では、こっちの事にとりかかりますか。しかし、テールの能力はもうすでにばれてしまいましたからもう使えない。となると、ここは純粋なる力でどうにかしますか。

「いきます！」

「ＯＫ！！」

て、そういえば別に私がやらなくてもよかったのか。となると、私ってなんのために呼ばれたんでしょう？まったくダメな作者ですね。

「我が名はエヴァンジェリン！！「闇の福音」！！最強無敵の悪の魔法使いだよ！！アハハハハハハ！！」

出ました。最強幼女（笑）エヴァちゃん。

「『おわるせかい』砕けろ。」

うーん、原作見てても思いましたけど、痛いシーンですよね。どれだけ悔しかったのでしょうね？

「わっ・・わわ私は治癒系の魔法は苦手なんだよ。」

「そうなんですか？まったく、いくら不死身だからってそれはないと思いますよ？」

「ええい！言うな！」

この後エヴァを弄り倒しました。

翌日

どうも、今例の別荘に来ています。え？飛びすぎ？作者のせいですよ。ちなみにナギ関係の話は興味がないので私は読書中。ギリシャ神話に関する本があったので呼んでます。・・・こっそり『王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）』に何冊か放りこんだのは秘密だ。

第十二話　いつの間にか第八巻に・・・（前書き）

み、短い・・・

第十二話　いつの間にか第八巻に・・・

どうも、木乃実です。突然ですが、現在原作第八巻です。え？七巻はどうしたのかって？実は修学旅行から帰ってきてすぐに風邪をひいてしまったのです。しかもこじらせてしまい入院するはめになり、退院したら既に弟子入りしていたのです。作者、手を抜きすぎでは？

まあ、それはおいておくとして、今日はやけに先生がやつれていたのでどうやらヘルマン登場の件は今夜のようです。まあ、先生の経験値を奪うつもりはないので今夜もいつも通り過ごす予定です。

でもっていつの間にか夜になっていました。え？なんでそんなに展開が早いかって？それは簡単。私は木乃香達と一緒に尾行をしていない。当然別荘での件とは無縁だ。だからこんなに早いのだ。

「おい、木乃実。さっきから自分の世界に入っていないか？」

「いえいえ、そんな事はありませんよ」

現在エヴァ達と木の上。無論、小太郎＆ネギＶＳヘルマンを観戦中だ。

「あ、暴走（オーバードライブ）ですね。あーあ、負けが見えましたね。あんなに闇雲に突っ込んだら返り討ちになるのがオチですね」

「くくく、その時はしょせんそこまでの器だったというだけさ」

「ずいぶんひどい言い草ですね」

「お前が言うな」

「むむ、どうやら小太郎のおかげで冷静さを取り戻したようでござるな」

「そのようですね。それにしても、息ぴったりですね」

「ああ。即興コンビにしては上出来だ。」

「あ、木乃香達やりましたね。いっきに状況を有利にしましたね」

「くく、そういえばお前、妹のピンチだというのに良いのか？ここにいて？」

あ、やっぱり聞いてきましたか。まあ、当然ですか。

「いざという時のためにエッジ達を配置していますよ」

「フフ、ぬかりがないな。それはシスコンがなせる事か？」

「ノーコメントで。さて、決着もついたようですし、私はこれで。アイ」

そうしてアイに掴まって降下。あれ？別に私が行く必要ないような？まあいいか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8891m/

真の天才ネギまに来る！

2010年10月20日13時07分発行